

自立支援多職種連携推進研修を開催しました!!

★利用者も支援者もみんながHAPPYに♪
～地域における多職種連携を考えよう!～



今号は「学びのページ」
2記事掲載!
「私のまわりの輝きさん」は
おやすみです。

CONTENTS

- 会員へのメッセージ P2
- 活動報告 広島市阿戸・矢野地域包括支援センター P3
- 学びのページ 在宅福祉 ICT 技術の最近の動向について P4
- 学びのページ 地域での防災への取り組みについて P5～6
- 研修報告「令和5年度自立支援多職種連携推進研修」 P7～9



広島県地域包括・在宅介護支援センター協議会
研修副委員長
黒木 勇治

皆さま、新たな年を迎えいかがお過ごしでしょうか。この度は令和6年能登半島地震におきまして被災された皆さま、ならびにそのご家族様に心よりお見舞い申し上げますとともに皆さまの安全や一日も早い復興をお祈り申し上げます。

今年度も残り少なくなり、来年度は医療保険、介護保険のW報酬改定の時期で、1月22日に審議報告が示されました。「地域包括ケアシステムの深化・推進」「自立支援・重度化防止に向けた対応」「良質な介護サービスの効率的な提供に向けた働きやすい職場づくり」「制度の安定性・持続可能性の確保」を基本的な視点として介護報酬改定が実施されます。

すべてのサービスに共通する事項として、感染症や災害への対応力向上、高齢者虐待防止の推進が挙げられ、業務継続計画未策定減算や高齢者虐待防止措置未実施減算が適用となります。令和3年度改定で3年間の経過措置期間が設けられましたが、あっという間に3年を迎え、各事業所の日ごろの備えや有事における対応力が一層求められます。

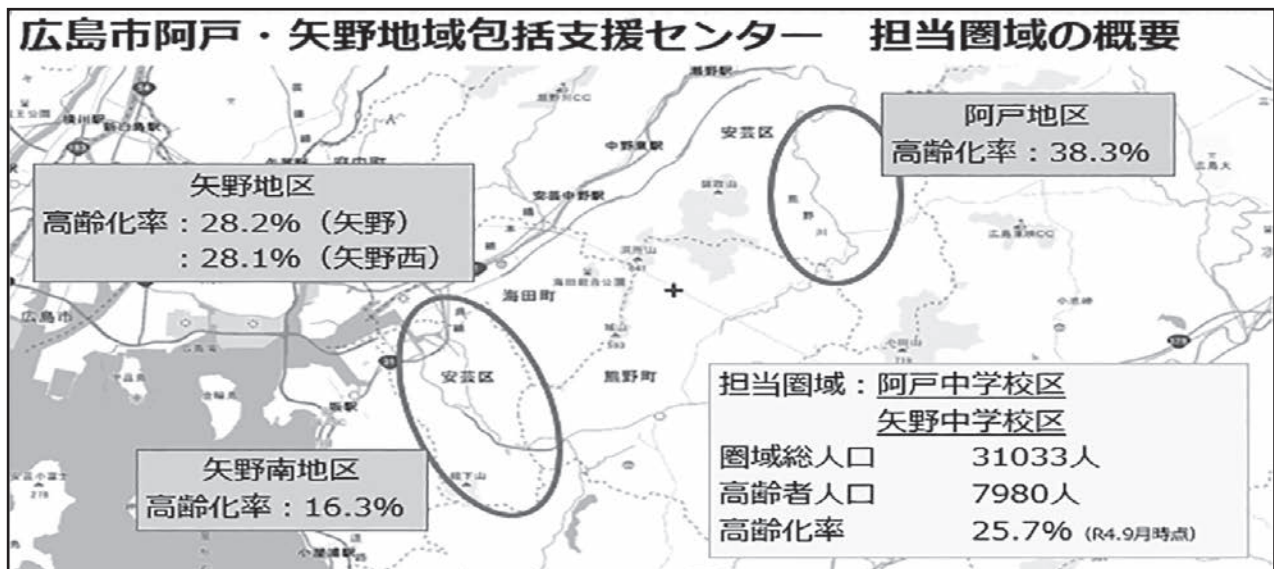
私は、当協議会内の研修委員会の副委員長を務め、基礎研修、現任者研修、生活支援体制整備研修、職員研修、リーダー研修、自立支援多職種連携推進研修を企画、運営に携わり、センターの運営に必要な知識や技術の修得と合わせて会員間の交流の促進を大切にしております。コロナ禍で集合研修の開催が難しくなり、数年間はオンラインでの開催を余儀なくされましたが、研修会や会議が広島市内で開催することが多く、遠方のセンターにとっては参加が難しかった研修等にオンラインであれば参加ができる、といったオンライン開催のメリットを感じ、内容に応じて開催方法を工夫しております。研修開催時のアンケートをもとにテーマや内容を検討し、進めております。皆さまからテーマや内容のご希望がございましたら当協議会までお知らせください。

平成29年度に行政や職能団体で構成される自立支援多職種ネットワーク推進会議を経て完成しました“これから手帳”は、人生会議（私の心づもり）と併せて生活に身近な自立支援、意思決定支援のツールとして活用でき、これから手帳の完成後も多職種ネットワーク推進会議を継続的に開催し、これから手帳の普及、啓発や自立支援の共通理解、認識等の現状や課題について協議を重ね、これまでも研修会や説明会を開催してきましたが、今年度以降、各職能団体の定例会等での研修機会が増え、県域の多職種連携研修の開催を進めております。

当協議会のホームページがリニューアルされ、これから手帳の活用方法の動画やマニュアルを掲載しております。その他研修案内等を随時更新しておりますので、リニューアル後のホームページをぜひ一度ご覧くださいませ。

広島市阿戸・矢野地域包括支援センター

広島市阿戸・矢野地域包括支援センターは、広島市東部に位置する安芸区の地域包括支援センターで、担当圏域は安芸郡3町（海田町、坂町、熊野町）と隣接しています。小学校区別で高齢化率を見ると、一番高い阿戸地区が38.3%、一番低い矢野南地区で16.3%とかなりの開きがあり、そうなるとう当然地域における課題にも地域差が見られます。当センターでは小学校区別に担当職員を配置するようし、それぞれの地域課題に対してアプローチをするようにしています。



一方で阿戸地区、矢野地区ともに共通する特徴としては、介護予防拠点事業が盛んな点です。圏域全体で100歳体操を週に一回以上実施している団体は計40カ所（R5年12月末時点）。R2年度時点では31カ所でしたので、コロナ禍以降も拠点数は少しずつ増えています。介護予防に対して熱心な地域が多い当圏域ですが、一方で課題もあります。それが①活動のマンネリ化と、②代表者の交代です。

①に関しては、今年度全拠点を対象に交流会を開催して、お招きした講師より新たな体操の提案と指導を行いました。ちょっとしたチップスと根拠のある指導は、代表者の方々にとって刺激になり、すぐに実践できる内容で大変好評でした。

ただ、この②に関しては、なかなか抜本的な解決策が見いだせていないのが現状です。代表者からは、年齢等から代表をすることがかなり負担だという声もあります。また急な怪我や疾病によって代表を続けることが実質困難になることもあります。どの組織にも云えることですが、世代交代、継続的な組織運営を如何に行うか。今後は副代表者と呼べるような方も確保し、その方々向けの研修会等も検討しています。今後も地域の皆さんと一緒に頭を悩ませながら、阿戸・矢野の介護予防の火を消さないようにしたいと思います。



在宅福祉 ICT 技術の最近の動向について

広島市清和・日浦地域包括支援センター 永見 悠騎

在宅福祉ICT分野は、高齢化社会の進展や、障害者の増加、ICT技術の進歩などにより、近年急速に発展しています。

具体的な動向としては、以下のようなものが挙げられます。

遠隔見守り・介護サービスの普及

センサーやカメラなどの機器を用いた遠隔見守り・介護サービスが普及しています。例えば、浴室や玄関などのセンサーが異常を検知すると、介護事業者へ通知されるサービスや、カメラの映像を介護事業者が24時間365日、モニタリングするサービスなどが提供されています。

健康管理・生活支援サービスの充実

血圧や脈拍などのバイタルサインを測定できる機器や、食事や睡眠などの生活習慣を記録できるアプリなどが開発され、高齢者や障害者の健康状態や生活状況を把握し、必要なサポートを行うためのサービスが充実しています。また、オンラインで医師や看護師に相談できるサービスも提供されています。

AIやIoTなどの技術の活用

AIやIoTなどの技術を活用した、新たな在宅福祉サービスや製品の開発も進められています。例えば、AIを活用した見守りサービスでは、AIがカメラの映像から高齢者の行動を分析し、異常を検知します。また、IoTを活用した見守り・介護機器では、センサーやカメラなどの機器がインターネットを介して介護事業者と連携し、高齢者の見守りや介護を支援します。

これらのサービスや製品の開発・普及により、高齢者や障害者の生活の質の向上が期待されています。具体的には、以下の分野でのさらなる発展が期待されています。

高齢者の見守り・介護サービスの高度化

AIやIoTなどの技術を活用した、より高度な見守り・介護サービスが求められるでしょう。例えば、AIを用いて高齢者の行動を分析し、異常を早期に発見するサービスや、IoTを用いて高齢者の生活状況をより詳細に把握するサービスなどが開発される可能性があります。

障害者の自立・社会参加支援の充実

障害者の自立・社会参加支援には、ICT技術が有効に活用されています。今後は、AIやIoTなどの技術をさらに活用することで、障害者の自立・社会参加をより効果的に支援することが可能になるでしょう。例えば、AIを用いて障害者のコミュニケーションを支援するサービスや、IoTを用いて障害者の移動や行動を支援するサービスなどが開発される可能性があります。

予防・重症化予防のためのサービス・製品の開発

高齢者や障害者の健康状態の維持・向上には、早期発見・早期介入が重要です。今後は、AIやIoTなどの技術を活用した、予防・重症化予防のためのサービスや製品の開発が進んでいくでしょう。例えば、AIを用いて高齢者の健康状態を予測するサービスや、IoTを用いて高齢者の生活習慣を改善するサービスなどが開発される可能性があります。

在宅福祉ICT分野の発展は、高齢者や障害者の生活の質の向上に大きく貢献すると考えられます。今後も、ICT技術を活用した新たな在宅福祉サービスの開発・普及が進んでいくことが期待されます。

※ 国保連合会が行う審査において、転記ミスによる居宅介護支援事業所の給付管理票と介護サービス事業所の介護給付費等請求明細書との不整合エラーは、全体エラーの約4割を占めています。

地域での防災への取り組みについて

広島市江波地域包括支援センター

広島市中区にある江波地区は中区で唯一「土砂災害警戒区域」「土砂災害特別警戒区域」があり(江波山、江波皿山及び丸子山周辺)、ほぼ全域で高潮・津波による浸水想定区域内でもあります。また、災害時に自力で避難する事が困難な「避難行動要支援者」の数や、災害危険区域に住む「避難行動要支援者」の数も中区で最も多い地区です。

江波地区では「防災を主体としたまちづくり」を目指し、災害への備えを通じた地域コミュニティの活性化への取組を江波地区社会福祉協議会と江波地域包括支援センターが令和3年度から行っています。

取り組みにあたっては、福祉的な観点から連携、支援する事で「住民同士の見守りや支え合い」「困り事の解決」「地域で活躍する担い手づくり」といったお互いに支え合う仕組みづくりも一体的に図る事が出来ると考え、その実現を目指しています。

令和3年度から江波地区社会福祉協議会と江波地域包括支援センターが共催で「げんき人研修会」を開催しており、令和3年度の研修では、まずは、地域の防災意識を高めるとともに住民同士のつながりを深める事を目的に開催し、「自助」「共助」「公助」について学び、江波地区の地域課題である「防災」についての住民の意識を深め、日頃の繋がりが災害時にも生かされることを学びました。

令和4年度は、中区地域起こし推進課と連携し、研修会を開催。江波地区で起こりうる災害について具体的に知り、防災士と共に江波二本松町内をモデルにまち歩きを行い、グループに分かれて防災マップの作成に取り組みました。その後、江波地区社会福祉協議会会長から各町内会長へ呼びかけ、取組は各町に広がり、町内会ごとに防災マップ作成のための説明会とまち歩きを実施しました。江波地域包括支援センターからも職員が参加し、民生委員やサロン世話人等にも呼びかけを行いました。その結果、江波地区全町内の「わがまち防災マップ」が完成しました。



防災士と一緒にまち歩きの様子

今年度は11月11日(土)に第三回目の「げんき人研修会」を開催しました。今回は中区地域起こし推進課、中区地域支え合い課、障害者基幹相談支援センター、中区ケアマネ連絡会、中区社会福祉協議会等にも協力を依頼し、事前に準備委員会を専門職で開催しました。災害時に自力で避難する事が困難な方(避難行動要支援者)について、誰が支援し、何処に避難するのかの計画(個別避難計画)作成をテーマに地域の多様な関係者がそれぞれ災害時にどんなことが出来るのかをともに話し合う内容を企画し、防災の取組を通して、平時からお互いに協力し合う関係づくりを深める事を確認しました。

令和5年度「江波げんき人研修会」報告

■開催日時:令和5年11月11日(土)9:30~12:30開催

■参加者:合計77名

○地域住民(町内会長/民生委員/サロン等世話人/町内会員/地区団体役員等)43名

○専門職(介護支援専門員/障害者支援相談員/サービス事業所職員/施設職員/地域包括職員等)26名

○行政(広島市社協/中区社協/中区地域おこし推進課/中区地域支えあい課)8名

講師:大阪公立大学都市科学・防災研究センター 教授 野村恭代氏

講演:誰ひとり取り残さないために~平時からの地域防災を考える~

●要配慮者とは? ●避難行動要支援者とは? ●個別避難計画の策定

平時からの「つながり」と要配慮者への「気づき」から、個人が個人を支えるのではなく、面で支えるため様々な関係者が情報を共有、連携し、個別避難計画策定のプロセスが大切であると学びました。具体的に大阪市住吉区浅香の取り組みを教えてくださいました。

●個別避難シミュレーションゲーム

昨年作成した「わがまち防災マップ」を使い、各町内でグループワークを行いました。

要配慮者が指定された気象状況のとき、どこに避難したらよいか、その時に困ることは何か、日頃からできることは何かについて、住民、専門職、行政の立場で意見交換。どのグループからも日頃からの「つながり」が大切であり、平時にどのような支援を受けておられるのか、こんなことなら自分たちの立場でできるかもしれない等と意見がでていました。

野村教授から最後に東日本大震災の被災地の住民が、今でも「もしあの時、どこにどういう人が住んでいるのか知っていれば助けられた命があったかもしれない…」と話す人がおられ、町内会単位で事前に話しておくことが大切であるとの話がありました。

~今後の取組について~

誰ひとり取り残さない地域にするためには、災害時だけでなく平時からのつながりを大切にし、出来ることは何か、考えることから始まるという事が、現在までの取組で地域と共有できつつあります。今後、災害時の避難計画に取り組む際は、江波地域包括支援センターがつなぎ役となり、本人、地域住民、福祉専門職、行政が情報を共有する場を作り、連携していくことを目指していきます。

研修会の様子



「令和5年度自立支援多職種連携推進研修」

令和6年2月17日に行われた令和5年度自立支援多職種ネットワーク推進業務委託事業 自立支援多職種連携推進研修「利用者も支援者もみんながHAPPYに♪～地域における多職種連携を考えよう!～ 目の前の大切な人の気持ちと響きあうために」を受講しました。

講師は一般社団法人広島県医師会 常任理事 魚谷 啓様でした。

講師は「医師会活動で在宅医療・多職種連携を担当する中で多職種の仲間たちと様々な経験を共有し、その結果、安心してお互いが助け合い、幸せを感じながら生きていくのに必要なことはシステムではなく、人がお互いの気持ちを大切にしようためのコミュニケーションスキルの体得と経験から学ぼうとする文化醸成しかない」と考えるに至った」との事でした。

初めに自立支援多職種ネットワーク推進会議(広島県地域包括・在宅介護支援センター協議会)発行の「これから手帳」の紹介がありました。

次にユマニチュードやオープンダイアログなど講師が学び、日々活用し、経験を重ねてきた中で大切なコミュニケーションスキルを、事例を交えてお話してくださいました。

どのお話もとても勉強になったのですが、その中で私が強く印象に残ったことは二つあります。

一つめは、その人のいないところで専門職だけでその人の話をしていると頭の中で解釈だけが進んでしまっていて事実とは異なるものが進んでしまう。また「支援する人、される人」という関係があると、つい「支援する人がより知っていて、より正しい」とか「従わないのは悪いことだ」などと思ってしまったり、自立を促しても思い通りに動いてくれないと「自立する意思のない人だ」「病識がない」「自覚がない」と感じてしまう。それはもしかしたら単に支援者の思い描く自立に賛同していないだけかもしれない、という内容。

二つめは、統合失調症や認知症などの診断名や暴言や介護拒否など行動面の命名を意識してしまうと本人の気持ちを聞くよりも、受診やサービスにつなげようとか薬を飲んでいただく、とか支援する人にとっては一見、何かの解決を示したように見えるかもしれないが当の本人達にとっては「誰も自分の話を聞いてくれない」と感じさせるだけで、当の本人達にとっては何ら助けになっていないこともある、という内容。

研 修 報 告

上記、二つの内容を聞いて、自分の普段の業務を振り返った時に、もしかしたら無意識で本人抜きで解釈していたり先入観を持っていたり、本人の話を聞き終わる前に制度やサービスへ繋げようとしていたりするかも、とドキッとして反省しました。

今回の研修に参加して、対人援助技術は日々発展していて、自分が学生の頃に学んだ知識はアップデートが必要であることを改めて感じました。利用者や支援者、専門職など自分の目の前の大切な人の気持ちと響きあうために、まずは講師が紹介して下さった参考図書を読み、日々学んで体得し、経験を積み重ねていこうと思います。

福山市北部地域包括支援センター 岩永 久美

参考図書

- 『開かれた対話と未来 今この瞬間に他者を思いやる』
ヤーコ・セイックラ、トム・アーンキル著、斎藤 環 監訳 医学書院
- 『オープンダイアログとは何か』 斎藤 環 著 医学書院
- 『ユマニチュードという革命 なぜ、このケアで認知症高齢者と心が通うのか』
イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ著、本田美和子 日本語監修 誠文堂新光社
- 『家族のためのユマニチュード “その人らしさ”を取り戻す、優しい認知症ケア』
イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ著、本田美和子 日本語監修 誠文堂新光社
- 『オープンダイアログ 私たちはこうしている』 森川すいめい 医学書院
- 『対話のことば オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得』
井庭 崇、長井 雅史 著
- 『いま、目の前にいる人が大切な人』
坪崎 美佐緒著、大久保寛司プロデュース エssenシャル出版社

(当日資料から抜粋)



(研修会の様子)

受講いただいた参加者の方の声をお届けします!

利用者も支援者も みんながHAPPYに♪ ～地域における多職種連携を考えよう!～



- この講演を聞いて改めて自分の利用者さんへの関わり方について考えることが多かったように思う。利用者さんを中心とした対応ができるようにしていかなければいけないと感じました。
- あらためて、自分になりたい支援者像がここにありました。不確実ななか一緒に居続ける。支援し続ける覚悟など、自分が同じチームの支援者に伝えても伝わりきらない。自分が言語化しにくいことがここにありました。ほかの支援者からは理解されないこの気持ちや手法をきちんと教えていただくことが出来ました。自分は間違っていないと確信をもってこのまま進みたいと思います。
- 診断名はいったん脇に置く、話したいことと話したことは違うかもしれない、準備をしない事が対話を助ける・・・など、興味深いワードが多くあり、とても勉強になった。
- 専門職だけで話し合うのではなく、本人と一緒に話し考えることの大切さを改めて考え直すきっかけになりました。
- お医者様の立場から今日のような話を伺うと、専門職として相手の気持ちを大事にしていくという当たり前だけどつい見過ごして、システムや技術やそういった策に走りがちであった自分の支援の方向性の軌道修正に活かせるとともに、医師の先生にもこういった考え方の先生もいらっしやるんだと励みになります。
- 先生が質疑応答の最後に言われた、頭で考えずに行動を基準に考えることに関して、非常に感銘を覚えました。
- 本人を残して支援者だけで話して決めてしまうところがある。というところが痛感したところです。
- 当事者の気持ちに寄り添うことの大切さを改めて感じました。つい解決を求めるあまり御本人が置いてけぼりになり、結果良い選択にならないことがあると反省します。多くの関係者がこれらのことを知って覚悟をもった関わりができるようになるといいと思います。

ご参加いただき、ありがとうございました。

編集後記

- ▶ 荒木 和美 (広報委員長).....
大変な年明けとなりました。おだやかで心はずむ春が待ち遠しいです。
- ▶ 永見 悠騎 (広報副委員長)
年始から悪いニュースで始まり心穏やかな1年の始まりではありません。
しかしこの経験から私たちは、困っている人を助けることの大切さや、優しさの大切さを
学ぶことができます。みなさまにとって良い1年になることをお祈りします。
- ▶ 高森 裕美.....
何かが起こるたびに、毎日の何気ない生活がこんなに大切なんだ、という事を思い知ら
されます。日々を大切に生きたいと改めて思いました。
- ▶ 長谷川 忠弘.....
石川県震災の被害が一日も早く収束し、被災された方々が一日も早く日常生活を取り
戻せることを願っております。
- ▶ 丸光 陽子.....
今年は地震に羽田空港の火災と今年はどうなるんだろうという始まりでした。令和6年度
は介護保険の改正もあります。怒涛の日々も落ち着く時が来ると信じてぼちぼちコツコ
ツがんばろうと思っています。
- ▶ 坂本 敬行.....
日を追うごとに能登半島地震の被害の甚大さが明らかになってきております。この度被
災した方々が一日も早く笑顔で生活できる日が来ることを心から願っております。

「これから手帳」を活用して、
住民・利用者の自立を高めましょう!

★ 説明会のご希望は、事務局まで♪



広島県地域包括在宅介護 支援センター協議会ホームページ

<https://shienkyou.org>

広島県地域包括 在宅介護支援センター協議会

検 索

QRコードを
読みとって
ください

